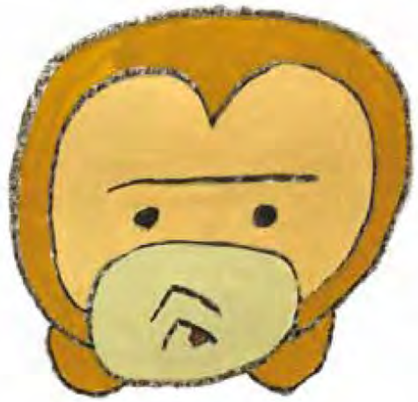
風を創るひとたち

静岡県障害者文化芸術活動支援センター

みらーと

平成30年度
静岡県障害者文化芸術活動支援センター運営事業
成果報告書



猿です。

静岡県障害者
文化芸術活動
支援センター
みらーと

〒420-0031
静岡県静岡市葵区呉服町2-1-5　5風来館(ごふくかん)4階

TEL **054-251-3520**　FAX **054-251-3516**
【相談受付時間】平日**10:00**〜**17:00**

URL　https://**mirart-shizuoka.com**
mail:　info@mirart-shizuoka.com

表紙作品　天野 由那：「友達を呼んだら」
裏表紙作品　益田 典邦：「猿です。」

平成30年9月19日(水)静岡県障害者文化芸術活動支援センターみらーと開所式　左から川勝 平太静岡県知事、
小出 隆司(特非)オールしずおかベストコミュニティ理事長、鈴木 壽美子静岡県文化協会会長，落合 慎悟静岡県議会副議長

風を創るひとたち

もくじ

ページ

03　❶ はじめに

05　❷ みらーとの取組　設立コンセプト

11　❸ 相談支援 事例紹介

17　❹ 静岡県内の障害者芸術支援の状況報告

25　❺ 支援人材の育成に向けた取組　開催報告

27　❻ 体験の機会創出　ワークショップ開催報告

31　❼ 発表の機会創出
みらーとアールフェスタ　イベント開催報告

37　❽ 他県センターとの連携と情報共有

43　❾ 協力委員からのメッセージ

47　❿ 作家家族インタビュー

51　⓫ 成果報告のまとめと今後の課題

53　⓬ 作品アーカイブ　写真ライブラリー

社会福祉法人 富岳会(御殿場市)での作品発掘の１コマ

1 はじめに

ご挨拶

当法人では「静岡県障害者文化芸術活動支援センター運営事業」の委託を受け、平成30年9月19日に静岡県障害者文化芸術活動支援センターを開設しました。

正式な名称は少し長いので「みらーと」という愛称をつけて活動して参りました。この事業は障害のある人の文化芸術活動の普及を通して、障害のある人の社会参加と、障害や障害のある人に対する県民の理解促進を目的としています。

みらーとでは文化芸術活動に取り組む障害のある人や、支援者、福祉事業所等からの支援の方法や権利の保護、作品の記録や保存の方法等に関する相談への対応、文化芸術活動を行っている人や団体の調査・発掘活動、文化芸術活動を支援する人材の育成のためのセミナーの開催、発表の機会としての展示会の開催、創作活動を体験するためのワークショップの開催を行いました。

また多角的な面からみらーとの事業を考えられるように福祉や芸術の専門家、教育関係者、弁護士からなる協力委員会を設置し、東海・北陸ブロック連携事務局など県内外のネットワークの人々からも多くのアドバイスをいただき、協力体制を築いて参りました。

半年間にわたる活動は手探りの状態でしたが、県内で活動する素晴らしい作家・作品を発掘し、東部、中部、西部の3か所で開催した企画展への出品に繋げることができました。このような成果を残すことができたのは関係した皆様の多大な協力のおかげだと大変感謝しております。この成果を「風を創るひとたち」という冊子にまとめましたのでご覧ください。

認定特定非営利活動法人
オールしずおか ベストコミュニティ
専務理事　鈴木 良夫

写真(上)特定非営利活動法人 エシカファーム(三島市)：作家が紙を継ぎ足して延々と計算式を描いていく。
(下)スタジオアルテ(三島市)：作家の特性に合わせて作業場をきちんと確保しいつでも制作に取り掛かることができる環境を用意している。

2 みらーとの取組 設立コンセプト

MIRAI × ART
ミライ　　アート

【未来と共に＋アート】＝「みらーと」。文化芸術を通じて、障害のある人、ない人が共生する社会の実現を目指すイメージを込めました。

静岡県障害者文化芸術活動支援センター「みらーと」は、障害のある人の文化芸術活動の振興を通じて、障害のある人の社会参加と、障害や障害のある人に対する県民の理解を促進するために設立されました。
みらーとでは、障害のある人の文化芸術活動の普及のために、文化芸術活動に取り組む障害のある人やその家族をはじめとした支援者、障害者支援施設や障害福祉サービス事業所、文化施設等への支援を行います。

みらーとでは障害のある人の文化芸術活動への意識を高め、気軽に参加できる環境を整えることで、文化芸術活動のすそ野を拡大し、障害者アーティストの発掘・育成を行ってきました。
文化プログラムとの連携により、幅広い分野でのネットワークを構築し、地域に根ざした障害のある人の文化芸術活動に繋げています。
これからも障害のある人の文化芸術活動の発表等の機会創出や、ワークショップの開催により、県民の障害のある人への理解推進を図っていきます。

Masa.S：増殖「動かざるモノ」

みらーとって Q 何ができるの？

A 障害のある人の文化芸術活動を応援するためネットワークを組み、それぞれの機関と連携してサポートしています。

プラサ ヴェルデ（沼津市）
第 20 回静岡県障害者芸術祭作品展 連携
ダンスワークショップ

プラサヴェルデ（沼津市）
第 20 回静岡県障害者芸術祭作品展 連携 パステルワークショップ

Q 静岡県障害者文化芸術活動支援センター みらーとって どんなところ？

A 障害のある人の文化芸術活動を支援するところです。

富山県障害者芸術活動支援センター
ばーと◎とやま
「HEART の中の ART」展示研修

1 障害のある人の文化芸術活動支援と作品の発掘をしています。

障害のある人やご家族、支援者の文化芸術活動を支援しています。障害のある人が文化芸術活動に気軽に参加できる環境を整え、広げていきます。その他障害者アーティストの発掘と育成も行っています。

2 障害のある人の文化芸術活動を通した新しい社会参加のかたちを模索します。

幅広い分野でネットワークをつくり、地域に根ざした活動に繋げています。

3 障害のある人の芸術家や作家としての周知をしています。

障害のある人の文化芸術活動を発表の機会を創出し、ワークショップの開催などを通して県民の方々の障害のある人への理解促進をはかっています。

天野 嘉人：「ワニ」

平成30年度 みらーとの活動実績概要

障害者施設・団体
特別支援学校等

連携・協力

県障害者文化芸術　活動支援センター
（支援コーディネーター　・専門アドバイザー）

連携・協力

文化プログラム推進委員会

相談支援

気軽に相談できる窓口を開設

【相談体制】
支援コーディネーターによる相談窓口

文化芸術活動を行っている団体との連携

情報収集・発信

【情報収集】
施設・団体・特別支援学校等を調査し、作品や才能ある芸術家の発掘、実態把握

【情報発信】
展覧会の開催、作家、作品、活動等を発信

ネットワークの構築

協力委員会を立ち上げ、意見交換・情報共有を実施

【委員会メンバー】
●アート系事業所職員
●学芸員
●美術団体関係者

発表等の機会創出

【情報収集】
施設・団体・特別支援学校等を調査し、作品や才能ある芸術家の発掘、実態把握

【情報発信】
展覧会の開催、作家、作品、活動等を発信

支援人材の育成

障害者のある人の文化芸術を支援する人材の育成研修を実施

【研修内容】
●作品撮影の基本
●著作権の基礎
●先進事例セミナー
●先進事例見学会

障害者芸術応援隊

出前講座やワークショップを実施し、本格的な芸術に触れる機会を提供

【講師】
●アート研修の講師
●著名アーティスト
●SPAC 俳優 等

【すそ野の拡大】

障害のある人の文化芸術活動への意欲を高め、気軽に参加できる環境整備により、文化芸術活動のすそ野を拡大し、障害者アーティストの発掘・育成を図る。

**世間から注目を浴びる
障害者アーティストの誕生**

【地域　連携】

文化プログラムとの連携、地域に根ざした文化芸術　ネットワーク構築により、活動につなげる。

**誰もが気軽に　参加できる
創作の場を　県内各地へ**

【県民PR】

障害のある人の文化芸術活動の発表等の機会創出やワークショップの開催により、県民の障害のある人への理解促進を図る。

**文化芸術活動を通じて
障害のある人が共生できる社会の実現**

背景作品　松尾 直樹：「僕の好きなもの」

武田 茂樹：「やせた台所」
ブリューゲル作「やせた台所」より

3 相談支援 事例紹介

相談支援

みらーとでは文化芸術活動に取り組む障害のある人やその支援者などからの相談を受けてきました。最も多かった相談は「発表の機会が欲しい」というものでした。そして次に多かったのが「文化芸術活動を行う場が欲しい」という相談でした。

みらーと主催の展示会やワークショップの開催を通じて、そのうちのいくつかはひとまず実現したといえますが、相談を聞いただけに留まり解決に至っていないものも残っています。音楽に関すること、小説、短歌、詩などの文芸について発表の手段、活動の場の提供の方法が課題として残りました。文化芸術の各分野に対応した助言を頂けるように、人材のネットワークを拡充する必要があると感じています。

また、相談件数はまだ少ないものの、著作権、契約、権利擁護などについては弁護士による個別相談のしくみを用意していくことが必要になると考えています。

全国に設置されている支援センターには相談事例と対応方法の成功事例が蓄積されてきています。全国の事例を共有することで、より迅速で適切な対応ができるようにしたいと考えています。

久保寺 悠介：
「笑う門には未来が来たる」

natsukari_CoCo」：
「CoCo・ワールド」

安田 幸大：「犬の”ゴン基地”」

相談事例　集計結果

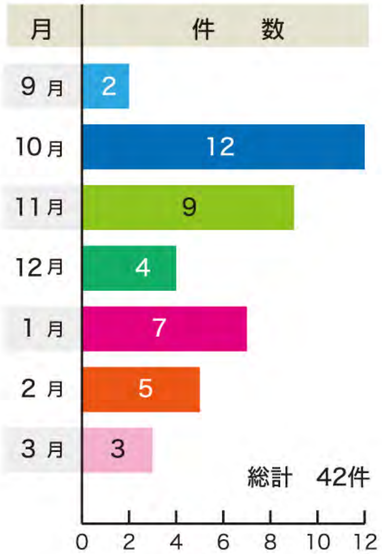
集計期間：平成30年**9月19日**～平成31年**3月7日**まで

延べ相談件数：42件

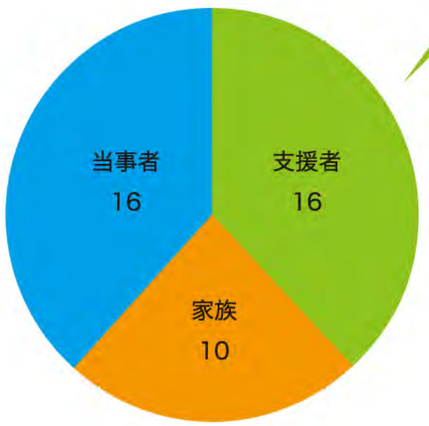
【相談分類別件数】

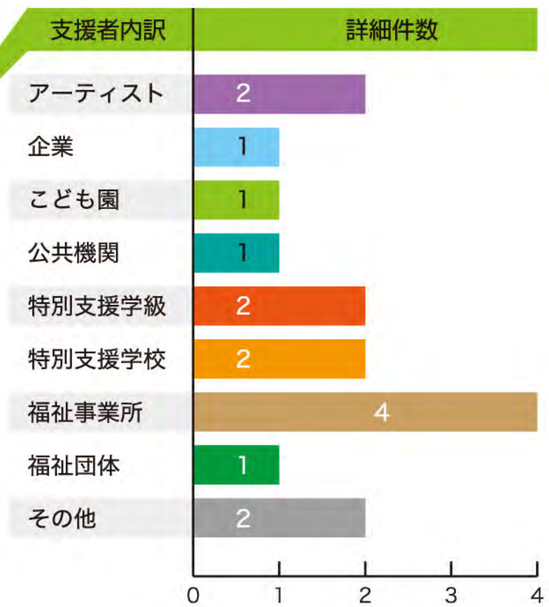
相談分類	件数
発表の機会が欲しい	18
アート活動の場の紹介依頼	8
みらーとの機能について	3
作品を販売したい	3
音楽の発表の機会が欲しい	2
広報を手伝って欲しい	2
著作権について知りたい	2
アーティスト紹介	1
アーティスト派遣	1
セミナー講師を紹介して欲しい	1
作品を複製したい	1
総計	42

【月別相談件数】



【相談者種別】





相談事例紹介

障害のある当事者から～

発表の機会が欲しい

1 自分が制作した作品をみらーと主催の展示会に出品できないか。

まずは作品の内容が分かる画像や作者の情報をみらーとに送っていただくよう伝えた。作品を選定した上で展示作品を決定するので、必ずしも出展できるとは限らない旨を付け加えた。

自分または家族、福祉事業所の利用者など、身近な障害のある人の作品の展示機会を求める声が最も多い。全ての作品を作品展に出展することは困難であり、他の公募展等の開催情報を収集し、提供できる手段を整理しておく必要がある。また、作品展への出展に向けて作者が準備しておくべきこと（選考のための画像データ、作品のサイズ、重量、画材、キャプション原稿、額装の状態等の情報）をチェックリストのような形で分かりやすく伝える方法を検討したい。

障害のある子の母親から～

発表の機会が欲しい

2 障害者モデルのファッションショーを開催できないか。

みらーと主催作品展「みらーとアールフェスタ静岡」の開催準備中に寄せられた相談であった。展示会場の静岡マルイ催事担当者に開催の打診をしたところ快諾をいただき、相談者と静岡マルイ担当者を繋ぐことで開催が実現した。

舞台芸術における発表の機会創出という位置付けで、作品展の開催と同時進行で支援を行った。静岡デザイン専門学校の学生の協力を得て、障害者モデルたちのヘアメイクを担当してもらうなど、多くの人材を巻き込むことで2日間にわたるファッションショーを成功させることができた。今後もファッションショーの開催が継続できるよう、相談者が所属する団体の自立した運営が進むよう支援を続けたい。

静岡マルイ前で行われた障害者モデルファッションショー

福祉事業所の職員から

発表の機会が欲しい

3 福祉事業所主催の作品展を企画しているが、作品展を開催できる場所を教えて欲しい。

障害者アートの作品展の開催実績があるギャラリーや公共施設等の情報をまとめ、提供した。

みらーと主催の作品展を企画する際に収集した展示会場等の情報を整理して、ホームページに掲載するなど、作品展を開催できる会場の情報が一目で分かる仕組みづくりを検討していきたい。

障害のある当事者から～

作品を販売したい

4 個人で布製品を制作しているが、授産製品の販売会などで売ることはできないか。

福祉事業所等の販売会では、個人が制作した製品を販売することは難しいことを伝えた。一方で、個人が制作する製品は、その製品に適した販路を探していくしかないため、みらーと運営団体（特定非営利活動法人オールしずおかベストコミュニティ）として持ち合わせている、小売店等の情報を提供した。

文化芸術活動支援の範囲で布製品の販売支援を扱うべきかということに疑問はあるが、みらーと運営団体の役割の一つが「授産製品の販売促進」であり、販路拡大に関するノウハウや小売店等の情報を保有していることから、対応することができた。ただし、このようなケースにおいて、文化芸術活動支援センターとしてどこまで踏み込んだ対応をする必要があるのか、他県の支援センター等と意見交換し、検討していく必要がある。

障害のある当事者から（身体障害）

文化芸術活動の場が欲しい

5 近隣で陶芸に取り組める場所を探している。

相談者の居住地の近隣に福祉事業所が運営する陶芸教室があったため、情報提供した。後日、相談者にフォローの連絡を入れたところ、陶芸教室までの移動に送迎が必要なこともあり、現時点では教室に参加するところまで至っていないとのことであった。

障害のある人の受け入れが可能な文化芸術活動の環境に関する情報の収集を進める必要がある。県域が広いため、ある程度細かなエリアごとに、アクセス方法、対応可能な障害の種別等の情報を含んだデータベースを整備したい。

武田 茂樹：「順番待ち」

小山 香乃美：「無題」

中野 佳織：「無題」

障害のある当事者の家族から

作品を複製したい

8 障害のある家族が制作した作品を販売したいが、原画は売りたくない。複製画やポストカード、缶バッジにして販売できないか。

低価格で発注できるネット印刷の会社を紹介した。

相談者は、入稿データの作成ができなかったため、当初はデータ加工のお手伝いを行った。作品の複製等に関する相談は今後もあると思われるため、対面で相談ができる地元の印刷会社を紹介したり、作品の複製や二次利用をテーマにしたセミナーを開催したりする等、引き続き支援方法を検討していきたい。

特別支援学校 教員から

講師を派遣して欲しい

9 みらーとのホームページをみて応援隊の存在を知った。年4回ほど美術や図工の指導者を派遣してもらえないか。

相談受付時点では、指導を依頼できる人材を把握できていない旨、また、今後、障害のある人を対象に実技指導できる人材の情報を収集し、派遣していく計画である旨を説明するにとどまっている。

特別支援学校等と連携していくためには、次年度のカリキュラム策定までに、講師の派遣や各種企画の開催に向けた調整をする必要があり、スケジュールを意識した支援の必要性を感じた。

（障害のある人が勤める）企業の管理者から

著作権について知りたい

6 障害のある従業員が業務で制作した作品と、勤務時間外に私的に制作した作品が類似している。著作権の帰属はどのように判断したら良いか。

相談を受けた当時は対応ができなかった。後日、著作権をテーマにしたみらーと主催の支援人材育成セミナーに相談者が参加され、参加申込時の事前質問に同様の質問を寄せていただいた。

セミナー講師の弁理士の説明によると、単に似ているだけでは私的制作物を制約することができず、類似性についての判断が必要になるということであった。なお、文化芸術活動の現場では著作権の帰属が微妙なケースが多々あることから、個別の法律相談支援の実施等、引き続き著作権に関する支援を実施していく必要がある。

公立中学校 特別支援学級 教員から

広報を手伝って欲しい

7 自分たちのコンサートの広報に協力してもらえないか。

当該イベントの情報を、みらーとのホームページ及びみらーと運営団体のホームページに掲載した。また、みらーとの支援コーディネーターが当該イベントを訪問し、相談者が担任を務める特別支援学級の活動を見学した。

支援コーディネーターがイベントを見学し、相談者とのつながりを構築できたことから、後日、当該特別支援学級への舞台芸術分野の出張ワークショップの開催が実現した。

八木 瑠南：「すわってポーズをしている友達」

大島 正年：「草」

佐野 匡：「無題」

4 静岡県内の障害者芸術支援の状況報告

埋もれていたアーティスト

静岡県東部、中部、西部を視察しての第一印象は、こんなに素晴らしい芸術があるのに、そしてこんなに素晴らしい取組をしているのに、何故今まで知られていなかったのだろうという思いでした。

もっといろいろな人に見て欲しい、知って欲しいという思いは、訪問を続けていく度に強くなりました。

個人宅からアトリエ、障害福祉事業所等日々の様々な取組の中で生み出されていく芸術作品たち。

しかし、話を聞くとそのいずれもが「生み出される作品をどのように扱って良いかわからない」、「作品を発表したいがそれを担う人材が居ない、企画や管理をする方法もわからない」、「生み出されるアートがそもそも芸術なのか落描きなのかの判断がつかない」「保管する方法も分からず場所も限られているので仕方なく処分してしまうこともある」等様々な理由によって発表の機会を失っているという現実を知りました。

実際に現場に赴いて視察をするとあるわあるわ。たくさんの素晴らしい作品があちらこちらから、そして次々に出てきます。そしてこの時もうひとつ気が付きました。

それは日々利用者さんや本人に寄り添う事業所の方々のアートの評価と我々のような客観的にアートを評価する者の「芸術作品としての価値観」、「作品本来の見方や評価」にズレを感じるということ。

つまり、作家本人の日常を知る方々の思う「良い作品」と、客観的に芸術を愛する人の思う「人の心をつかむ豊かな表現」の評価は隔たりがあるということです。

専門的な芸術支援人材育成の必要性をつくづくと感じた瞬間でした。

中間支援機関の必要性

訪問した事業所で話を聞くと、よく出る3つの言葉がありました。「人材不足」、「時間不足」、「資金不足」。どこの事業所も忙しさや疲弊と格闘しながらギリギリの境界で奮闘していました。時間数は事業所によって様々ですが「療育」や「レクリエーション」の目的で絵画や芸術プログラムを取り入れている施設があります。

しかし本来の業務とは異なるこれらのプログラムを確立させていくのは並大抵のことではありません。せっかく生み出される素晴らしい芸術作品を「忙しい日常に埋もれさせてしまう」ことになりかねないという状況がそこにありました。

こうした問題を打開すべく、「障害者芸術の現場」との中間に位置し「社会」と繋げる活動を専門に担う障害者芸術支援機関が必要不可欠であると改めて感じました。

松井 久悦：(左上)「気になるフォークリフト」 (右上)マジックで塗った「地図」
(右中)「木魚」 (下)「おばあちゃんの背中」

西部地区発掘状況報告

いきなりのスター登場

西部地区からスタートした視察行脚。まずは県内事業所・施設等へ送った「作家・作品募集アンケート」にご応募いただいた作品の内容を確認し、検討の上で、個人宅、事業所、福祉施設、特別支援学校など様々な活動の場の現地調査に向かいました。

応募者の一人、安間佐恵さんはお母様からの封書（作品写真封入）での応募でした。

現場に到着すると佐恵さんのご両親の優しい出迎えの後、早速創作部屋へ。そこには驚きの作品があふれ、一瞬で目を奪われました。

8畳ほどの創作部屋には、所狭しと置かれた驚きのクオリティとデザインセンスが光る貼り絵作品の数々が用意されていました。

お母さんの愛情が込められた丁寧な額装により作品の状態も非常に良く、制作の途中経過もきちんとアルバムに収められていました。

作品に顔を寄せ、間近で鑑賞すると、細部に渡って妥協を一切許さない緻密な作業と天性のものとしか言いようのない素晴らしいデザインセンスに、驚きと心の奥から湧き上がる「ワクワク感」を感じました。それは、日本はおろか世界中どこに出しても全く引けを取らない素晴らしい作品に出会えた瞬間でした。

障害福祉事業所のアートへの取組

事業所の方々とアートについて話をしていて度々出てくるワードがあります。それは「療育」と「レクリエーション」。

これは障害福祉事業所が利用者に対して行っている活動のひとつですが、高じて「アート活動」となっているケースが多く見受けられました。

障害のある人たちと一緒に創作活動を楽しむことで「落ち着いた時間を過ごせる」「心が安定して問題行動が減った」「仲間とコミュニケーションが取れるようになってきた」等の効果を感じている上、何より彼らには「上手に描こう」という感覚や考えが無い。故に純粋に絵を描く時間を楽しみ、ただひたすらに自分の思いを絵に注いでいける。途中、嫌になってしまっても「また描きたい」と思うその時が来るまで支援員さんはそっと見守っていてくれる。

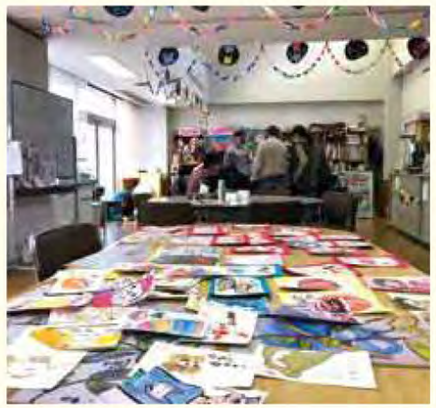
障害のある人たちと支援員の方々とのこうした信頼関係の中で育まれたアートがまさに、見る人へ心地良いメッセージとなって届いているのではないかと感じました。

西部地区視察先一覧

作家作品募集案内を一斉配信した中で問合せ・応募・推薦のあった個人・事業所を中心に視察

1. 安間 佐恵さん宅（浜松市）
2. 浜松市社会福祉事業団　浜松市発達医療総合福祉センター はままつ友愛のさと（浜松市）
3. 社会福祉法人　遠江学園　就労継続支援Ｂ型事業所　ひくまの（浜松市）
4. 社会福祉法人　草笛の会（菊川市）
5. 松井 久悦さん宅（菊川市）
6. 社会福祉法人　ひかりの園　こもれびの家（浜松市）
7. 静岡県立浜松特別支援学校　城北分校（浜松市）
8. 静岡県立袋井特別支援学校（袋井市）

写真(右ページ上)社会福祉法人 草笛の会 作品保管場所(菊川市)
(右ページ下)安間 佐恵さん宅(浜松市)
(左ページ右上)浜松市社会福祉事業団 浜松市発達医療総合福祉センター はままつ友愛のさと(浜松市)利用者作家の作品
(左ページ右下)同施設内の写真
(左ページ左)松井 久悦さん宅(菊川市)



東部地区発掘状況報告

クオリティの高い アートが次々と

とにかく東部地区はクオリティが高い。というより「アートによる療育活動が盛んであり、アートにおける事業所の取組意識が高い」といった方が適切かもしれません。

例えば障害福祉事業所に月に何回かアート指導の先生を招いて利用者に絵を教える。しかしそれ以外にも「支援員を対象にアートの指導法・利用者の個性や特性を引き出し、良さを引き出す方法を教える講座を開いている」と聞いた時、なるほど、だからここまで生き生きとした表現豊かな作品が生まれるんだと納得しました。

その他にも支援員の中にデザインやアートのスキルを持つ人材を登用するなど様々な側面からアート活動の支援を盛り上げているシーンに出会いました。

どの障害福祉事業所を訪れても感じたこと。それは支援員の方々が利用者一人一人と丁寧に接し、性格や特性を理解し、お互いに信頼関係を築く努力をしている中で質の高いアートがが生まれ、利用者の感性が育まれているということでした。

例えば発掘調査の中で絵を拝見させていただいていると、その絵のこと以外にもその作者のことに話が及びます。まるで我が子（年上の場合もある）の事のように笑顔で話してくれるのです。作者がどんな状況、どんな手法で描いていたのかが明確に伝わってきます。それだけその利用者に寄り添っていたのだなとその度に思うのです。

写真（上右・左）社会福祉法人 富岳会（御殿場市）
（中）社会福祉法人 見晴学園 みはらしの里（三島市）
（下）社会福祉法人 富岳会（御殿場市）

東部地区視察先一覧

作家作品募集案内を一斉配信した中で問合せ・応募・推薦のあった個人・事業所を中心に視察

1. 特定非営利活動法人　エシカファーム（三島市）
2. 特定非営利活動法人　EPO（富士宮市）
3. 社会福祉法人　三島市障害者福祉会 のびる作業所（三島市）
4. 社会福祉法人　三島市社会福祉協議会 さわじ作業所（三島市）
5. Masa.S（沼津市）
6. 社会福祉法人　見晴学園 みはらしの里（三島市）
7. 社会福祉法人　婦人の園　障害者支援施設 インマヌエル（小山町）
8. 社会福祉法人　富岳会（御殿場市）

次に必要なのは発信力と マネジメント力

ただ、問題もあります。それはそれらの素晴らしい作品がまだまだ表舞台に出る機会が少ないということです。

「障害者が描いたアート」ではなく「現代アート」といっても過言ではないクオリティの絵画がここでも羽ばたく機会を得られずに埋もれているわけです。

障害福祉事業所の状況は他の事業所同様、「人材不足」、「時間不足」、「資金不足」の3不足。それからここではもうひとつ。「発表の機会不足」。

どこの障害者福祉事業所も発表の機会は創出しています。しかしそれは「施設内祭り」だったり、「地元周辺中心の展示会」だったり。いずれも公民館やスーパー、病院や行政施設の展示コーナー、喫茶店などでの展示会が多く、まだまだ広くアピールできているとは言えない状況でした。ここでも芸術の専門性を持つ中間支援機関の必要性を強く感じました。これらクオリティの高いアートが数多く存在することを確認した今、日本のみならず世界へ向けた展示を企画し、アートや作家を売り込み、発信していくことのできる専門性とマネジメント力を持つ機関が今後活躍することは間違いないと確信しました。

中部地区発掘状況報告

障害福祉事業所から個人宅まで

中部地区の視察は大きな施設や事業所ではなく、どちらかといえば個々の事業所やアトリエ、個人宅が中心となりました。

思えば静岡市は、静岡県の中心的都市ではあるものの、東部地区や西部地区のように積極的にアートを取り入れた活動をしている障害福祉事業所や施設には出会えませんでした。これは少々意外なことでした。

その反面、保護者が中心となって精力的にアートを取り入れた活動をしている個人や団体は数多く存在しています。そんな方々を紹介していただきながらの視察となりました。

静岡市内の就労継続支援B型事業所では利用者が下請け仕事の合間や仕事が一段落した頃合いをみて絵を描くというやり方でアート活動を積極的に行い、その描いた絵を展示会や授産製品へ採用し販売して利用者への工賃へと反映させていました。

また、アートを通じて障害児と向き合った活動を続けているアトリエでは、個々の子供たちの特性に合わせて一緒に楽しめるアート活動を継続して続け、子供たちと丁寧に接することで、長い時間を掛けて信頼関係を構築していました。

個人宅で精力的にアート活動を展開している作家とその家族は、とにかく作家本人の才能や意志を尊重し、「障害者アーティスト」や「アールブリュット」等いずれにも属さない「一人の独立した現代アーティスト」として活動できるようなサポートを独自で行っていました。

写真（右ページ上）櫻井 陽菜（静岡県立藤枝特別支援学校 焼津分校）：「華模様」
（左ページ上）暮林 匠（ちいさなアトリエ）：「マイワンダーランド」
（左ページ中）佐野 匡（ひまわり事業団 それいゆ）：「無題」・紙袋に描写
（右ページ）静岡県立藤枝特別支援学校 焼津分校 美術準備室

中部地区視察先一覧

作家作品募集案内を一斉配信した中で問合せ・応募・推薦のあった個人・事業所を中心に視察

1. 静岡県立藤枝特別支援学校 焼津分校（焼津市）
2. 社会福祉法人　藤枝すみれ会　東部すみれの家（藤枝市）
3. ちいさなアトリエ（静岡市）
4. 社会福祉法人 静岡手をつなぐ育成の会 ラポールみなみ（静岡市）
5. 特定非営利活動法人 ひまわり事業団 それいゆ（静岡市）
6. waC（ワック／ wonderful art COMMUNITY）（藤枝市）
7. 松木 風太さん宅（静岡市）
8. 社会福祉法人 愛誠会　望未園（静岡市）

対話するアートとは

特別支援学校の美術教諭に障害のある人のアート活動について興味深い話を聞きました。

世間一般のアートと障害のある人のアートの違いは一体何なのか。

それはおそらく感情を伝えるための言葉や意思の疎通がうまくできない彼らだからこそできる表現があるのではないか、ということでした。

言葉ではうまく伝えられない感情を、アートを用いて共有し、伝えたい相手とコミュニケーションをとっていく「手段としてのアート」。アートに込められたメッセージが時に、お互いを理解するための「言語」となるからこそ生まれる表現があります。だから彼らの絵は豊かなのかもしれません。

ただ、ここでも問題は作品発表の場の創出。年1回から数回の作品展や個展の独自開催がメインとなり、作品を積極的に発表し広く社会と繋げていく活動をしているのはごく少数。感動を呼ぶ素晴らしい作品が多数あるにも関わらず認知度はまだまだ低く、ここでも専門的に繋げていく中間支援機関の必要性を強く感じました。

5 支援人材の育成に向けた取組　開催報告

福祉事業所職員や福祉団体職員、家族など日頃障害者支援の現場にいる人たちに支援のノウハウを伝える研修としてセミナーを3回開催しました。今後は芸術分野の人材を対象に、障害のある人に支援を行うためのノウハウを提供するセミナーも開催したいと思います。

1. スマホで撮影 基本のテクニック

日　時　平成31年1月16日(水)13:30〜15:30

場　所　障害者働く幸せ創出センター会議室

参加人数　23人

ファシリテーター

角地 智史氏 ／新潟県アール・ブリュット・サポート・センター
アートディレクター・写真家

内　容

初めてのセミナーとして作品撮影の技術向上の実習を行いました。次々に生み出される作品の記録・保存は支援者にとって悩みの種となっています。また、作品を発表に繋げるためにも撮影テクニックのセミナーはニーズが高いと考えました。参加者の多くは福祉事業所の職員で、作品撮影だけでなく授産製品を上手に取りたいというニーズが高いことが分かりました。撮影の演習を主体とした実践的なセミナーで、今後も中級編等シリーズ化を望む声もありました。

アンケート

「実践的に学べてよかったです。」
「写真はいつも難しいなと思っていたので、基本的な事がわかってよかったです。」
「実際に撮影しながら進めていき、わかり易かったです。」

2. アート活動のための著作権入門

日　時　平成31年2月5日(火)13:30〜15:00

場　所　障害者働く幸せ創出センター会議室

参加人数　23人

ファシリテーター

坂野 史子氏 ／静岡のぞみ法律特許事務所　弁護士・弁理士

内　容

著作者には著作権と著作者人格権があること、権利保護のために契約書が大切であること、著作権は文化の発展に寄与する事を目的としていることなど網羅的に解説いただきました。アンケート結果からも分かるように、テーマが広範なため、参加希望者から事前に質問を集め、参加者が知りたい具体的事例を掘り下げられるような形を考えたいと感じました。

アンケート

「具体的に契約書に盛り込む内容や作成するポイントを知りたかった。」
「もっと具体的な部分の相談ができるとありがたいと思った。」

3. 障害者アートの魅力と可能性

日　時　平成31年2月16日(土)15:00〜16:30

場　所　静岡マルイ 3F
(みらーとアールフェスタ静岡会場内)

ファシリテーター

福島治氏 ／フクフクプラス・デザイン部代表　デザイナー

内　容

ソーシャルデザイナーとして障害のある人の創作した作品を様々な形で社会に広める仕組みづくりを行っている福島氏をお招きし、最近の活動についてご紹介いただきました。オフィスに展示する絵画作品がもたらす効果の比較実証実験で、名画を展示するよりも障害者アートを展示する方が癒しやリラックス効果が高いという実証を得ているというお話に参加者の関心が集まっていました。

参加人数　20人

6 体験の機会創出　ワークショップ開催報告

創作活動を体験するワークショップを8種類開催しました。ダンス、舞台芸術など身体表現のワークショップのニーズが高いことを実感しました。障害のある人にとって創作体験の機会となるだけでなく、日頃、障害のある人と接する機会がない人たちにとっては障害について理解を深める場になります。今後はより多くの人に参加して頂けるように開催場所や開催日時についてさらに検討したいと考えています。

1. 遠州織物でハンカチをつくろう

日　時　平成30年10月26日(金) 10:30〜12:00

場　所　鴨江アートセンター(浜松市)
(静岡県障害者芸術祭会場内)

ファシリテーター

戸澤智也子氏 ／AURAソーイングスクール主宰

内　容

日頃、縫製作業を指導している講師をお招きして、オリジナルハンカチ制作の体験を行いました。似顔絵が上手な参加者が他の参加者に似顔絵を描いて上げるなど、作業しながら楽しく交流する姿が見られました。

参加人数　10人

2. シルクスクリーンプリントにチャレンジ

日　時　平成30年10月26日(金)13:30〜15:00
27日(土)10:30〜12:00、13:30〜15:00

場　所　鴨江アートセンター(浜松市)
(静岡県障害者芸術祭会場内)

ファシリテーター

BOB ho-ho
(ホシノマサハル、ウエダトモミ)/ アートユニット

内　容

ポストカードや木材、エプロンや傘など様々な素材に自由にスクリーンプリントを行い、色と形の組合せから生まれる創作活動を楽しみました。講師のお二人の声掛けやアドバイスが参加者の発想を膨らませるようで、会話がはずむ賑やかなワークショップになりました。

参加人数　12人

3. かかわり、感じて、たいわする

日　時　平成30年11月2日(金)
10:30〜11:30、13:00〜14:00

場　所　プラサ ヴェルデ(沼津市)
(静岡県障害者芸術祭会場内)

ファシリテーター

砂連尾理氏 ／ダンサー・振付家

内　容

事前にお申込みのあったグループだけでなく、飛び入り参加のグループが増えて展示会場全体を踊り歩くという自由な雰囲気のワークショップとなりました。
簡単な動きから始まり、徐々に周囲の人と関係する動きに進化し、身体の動きを通してコミュニケーションをとることをそれぞれの参加者が楽しんで体験しました。

参加人数　30人

4. 初めてでも簡単♪パステルアート

日　時　平成30年11月3日(土)
10:30〜11:30、13:00〜14:00

場　所　プラサ ヴェルデ(沼津市)
(静岡県障害者芸術祭会場内)

ファシリテーター

松尾雪音氏 ／学芸員・デザイナー

内　容

粉状にしたパステルと型紙を使用し、ポストカードにお化粧をするように色付けして柔らかな色調の作品制作を行いました。制作過程で互いに作品の出来栄えをほめ合いながら、作品を通じて会話が生まれました。参加者たちの穏やかな笑顔が印象に残りました。

参加人数　4人

5.「グラスデコ」でXmasオーナメントづくりを楽しもう

日　時　平成30年12月15日(土)
10:30〜12:00、13:30〜15:00

場　所　グランシップ 6Fギャラリー
(愛護ギャラリー展会場内)

ファシリテーター

うんのちなみ氏 ／グラスデコアーティスト

内　容

静岡県知的障害者福祉協会主催の作品展「愛護ギャラリー展」の会場内をお借りして開催しました。作品を鑑賞しているうちに自分でも何か作りたいという気持ちが生まれているようでした。

参加人数　25人

6. グラスデコ出張ワークショップ

日　時　平成31年2月20日(水) 13:00〜16:30

場　所　静岡手をつなぐ育成の会
ラポールみなみ 就労継続支援B型事業所

ファシリテーター

うんのちなみ氏 ／グラスデコアーティスト

内　容

利用者の作品をモチーフにグラスデコの線画作成から色塗りまでを体験しました。アート活動を製品化に繋げている事業所で、新しい画材の体験を活動の刺激にしたいと考えました。我々の訪問を大変歓迎して頂き、訪問者とコミュニケーションを取ろうと盛んに話しかけてくる利用者がいました。創作活動体験のイベントは障害の有無を超えて交流する場になります。
今後さらに多くの機会を作っていきたいと感じました。

参加人数　15人

7. グラスデコ交流会　〜色彩の癒し〜

日　時　平成31年2月23日(土) 13:00〜18:00

場　所　静岡マルイ 3F
(みらーとアールフェスタ静岡会場内)

ファシリテーター

うんのちなみ氏 ／グラスデコアーティスト

内　容

支援に携わる人たちと一緒に創作体験をしながら交流を図りたいと考え、企画しました。
手を動かしながら展示している作品を話題にしたり、障害のある人のアート作品について語り合う場になりました。福祉関係者も一般の人も、もっと呼び込めるようにしたいと感じています。

参加人数　8人

8. 舞台芸術出張ワークショップ
心とからだをたくさんつかって表現しよう

日　時　平成31年3月4日(月) 10:00〜11:30

場　所　静岡市立大里中学校 武道場

ファシリテーター

宮城嶋遥加氏 ／俳優 静岡県舞台芸術センター(SPAC)所属

内　容

SPACの俳優として活躍されている宮城嶋遥加氏をファシリテーターに迎え、みらーとへの相談をきっかけに知り合った特別支援学級の皆さんと舞台芸術のワークショップを行いました。
相手の動きを真似し合ったり、ただの箱ティッシュを「大切なもの」に見立ててお互いにプレゼントし合ったりと、想像力と演技力を磨きました。最後には最近見たばかりの宮城嶋氏が出演する演劇のフィナーレを全員で演じることができました。
まだ寒い季節の開催でしたが、参加者たちは途中から半袖になるほど夢中で取り組んで、終わりの挨拶で「楽しかった！」という感想をたくさんもらいました。

参加人数　12人

みらーと アール フェスタ
Mirart Art Festa

7 発表の機会創出
みらーとアールフェスタ　イベント開催報告

障害者アートではなく現代アートとしての発表を

展示の計画を任された時、いや、それ以前にまず最初に思ったこと。それは「障害のある人の描いたアート展」という位置付けには絶対にしたくないという思いでした。

「アート鑑賞」→「感銘を受けた」→「絵画のこと、作家のことをもっと知りたくなった」→「たまたま障害のある作家の絵だった」となる展示会にしたいと思いました。

抽象絵画の巨人、パウル・クレーやワシリー・カンディンスキー、ジョアン・ミロ、ピエト・モンドリアンなどにも全く引けを取らない感覚・独自の描写表現を持ち合わせた個性は、もはや芸術以外の何ものでもないと思います。あえて芸術に境界を設けること自体に疑問を感じています。

とにかく展示会の計画、そして作品・作家の発掘・視察はワクワクするものでした。例えれば視察前日はまるで「遠足の前日の園児」のような気持ちでした。

ただ、会場は受託初年度事業ということもあり、小規模なスペースでのスタートとなりました。

薄暗い蛍光灯の下でただ並べるだけの寂しい展示や公民館や市役所の一角で「障害のある人の描いたアート展です。どうか見ていってください。」といった悲しい展示会になるようなことだけは絶対に避けようと思っていました。

作家の個性を最大限に引き出し、子供から大人までみんなが興味を持って楽しめる展示にしよう。彼らの描く世界観や魅力を多くの人に知ってもらえる「出会いの場」にしよう。そう考えました。

実は私もそんな経験をした一人です。

ギャラリー運営を模索し、作家を探してギャラリー巡りをしていた頃、ふと入ったギャラリーで素晴らしい作品との出会いがありました。

それはまさに衝撃でした。その作品にはそれまで観てきたどの作品にも無い美しさと力強さがありました。

慌てて展示会場の運営者に事情を説明し、是非作家を紹介して欲しいと話すとその作家こそ、障害のある作家だったのです。

それはまさにそれまでの「絵画に対する考え」が一変した瞬間でした。

作品を選定する勇気と覚悟

まずは対象となる作品に会いに行くこと。これが先決でした。出会った作品の中から更に作品を選定しなければなりません。その選定に関しては勇気を持って、心に覚悟を持って臨みました。

支援者の方や家族・親族は作品を1枚でも多く展示したいはずです。それが喜びであり、描いてきた成果でもあるからです。しかし、限られたスペースで「ファンになってもらう」、「興味を持ってもらう」には少なくとも多くの作品の中から魅力的な作品を選定する必要がありました。描いた作品を選定せず、壁いっぱいに貼られた「展示の平等性（全員発表）」を謳ったアート展ではファンを獲得することは難しいのです。

まずは「作品の素晴らしさ」で展示を鑑賞していることの「喜び」を感じてもらう。「すごい描写力ですね」、「これは真似ができない表現です」、「この発想力は自分の想像を遥かに超えています」、「とにかく驚きです」などの絵画鑑賞の「満足」を味わってこそ「次の展示も楽しみにしています」、「次回開催時には是非案内を送ってください。次は友達も呼んできます。これは皆に知って欲しい作家ですね」となるのではないでしょうか。

実際に視察を続けていると様々な個性の作品に出会います。

障害福祉事業所や家族のように普段から作者に接している方々と異なり、我々はあくまでも客観的な視点で作品を対等に見ることができる立場です。

作品の「好み」はそれぞれあるとは言え、パっと目に入るインスピレーションで「これだ！」と思わせる作品は本物です。

私はそんな作品に出会えた感動の瞬間を大切にしています。その「一瞬の感動」こそが、一般の人々をも魅了する「答え」だと思います。

つまり、我々は「一般のお客さんの目」の代わりになる存在にならなくてはいけないのです。もちろん、美術的な知識や経験も必要です。

しかしこの「一瞬の感動」は何を持っても惑わされない「核」となるものだと信じて疑いません。

勇気と覚悟を持って作品を選定させて頂くこと。そして選定した作品にきちんとした説明責任を持つこと。何が良いのか。どこが素晴らしいのか。作者をも含めた作品のストーリーをお客さんに積極的に紹介し、ファンになってもらう努力をすること。そしてこの世界の素晴らしさを一人でも多くの方々に知っていただくこと。

そんな思いも胸に秘めてこれからも活動を続けていきます。

みらーと アール フェスタ 静岡

【日　時】平成31年2月15日（金）～28日（木）
【場　所】静岡マルイ 3F（静岡市）
【出品点数】71点　【来場者数】758人

みらーと アール フェスタ 浜松

【日　時】平成31年1月25日（金）～31日（木）
【場　所】遠鉄モール街ビルany 1F
展示・販売スペース（浜松市）
【出品点数】38点　【来場者数】1,512人

みらーと アール フェスタ 沼津

【日　時】平成31年2月8日（金）～14日（木）
【場　所】駅前コミュニケーションスポット
イーラde 1F催事スペース（沼津市）
【出品点数】43点　【来場者数】1,728人

展示小屋と看板の出現。アート×デザインが共鳴した瞬間

今回展示の会場となる場所を視察した時に直感で思いました。「このままでは十分な演出ができない、ただのつまらない展示会になってしまう」。

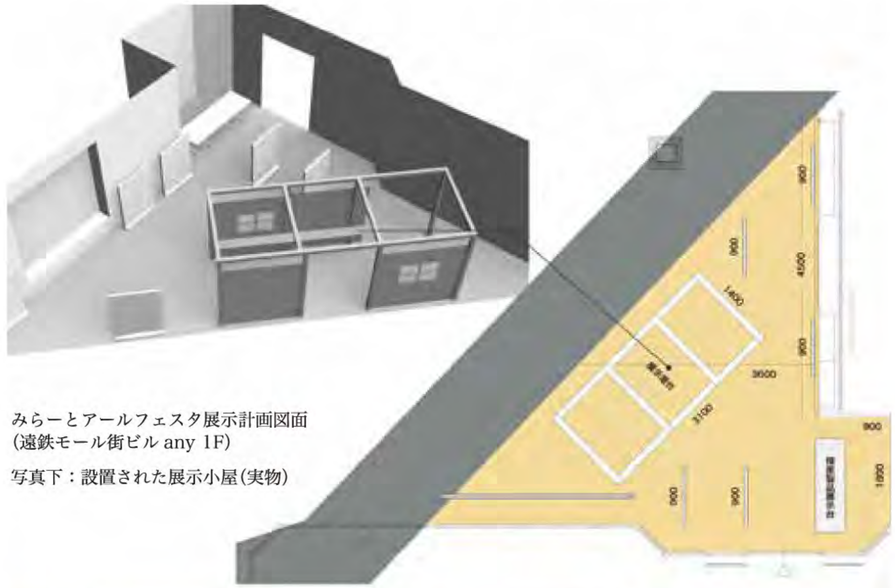
その会場は白い蛍光灯のみでスポットライトやピクチャーレールの設置も無く、しかも壁にピン打ちすることすら禁止され、会場内に大きな柱が鎮座する「空きテナント貸し空間」でした。

他店舗があり、通路となっているその場所はある程度の人通りはあるものの、言ってみればただの通り道。このまま白い蛍光灯に照らされ、据え置きの青いパーテーションでの展示は背筋も凍るような最悪の展示会を容易に想像させました。

そこで考えたのが展示小屋の設置。小さなお家のような小屋を作り、部屋での展示を演出するもの。作品を引き立て、変化を付け、お客さんを誘導するツールとしての展示小屋。お洒落で可愛い、小さな白い展示小屋の制作。即決でした。

そしてもうひとつ。展示会の顔となる「看板の設置」。テーマは現代アート展ですから、引き立つアートを大きく堂々と設置しました。視認性もインパクトも高く、通りすがりのお客さんも振り返ります。つられて足を留め、入場するお客さんもいました。

今回は何しろ作品のクオリティが高く、どの作品を持ってきても展示会が成功することは確信していました。しかしお客さんの来場満足度を上げることが次の「みらーとアールフェスタファン」を増やすきっかけとなると思っていましたので「雰囲気づくり」には最大限の努力を惜しみませんでした。アート×デザイン。お互いが良い形で共鳴しあい、引き立ち合う瞬間でした。



みらーとアールフェスタ展示計画図面
(遠鉄モール街ビル any 1F)

写真下：設置された展示小屋(実物)

障害者モデル ファッションショー

協力委員からの紹介で「息子がモデルを目指している。静岡でファッションショーを開催したい。」という相談がありました。障害のある人のお母様からでした。作品展の打ち合せで頻繁に会っていた百貨店の担当者に話を持ちかけたところ、とても興味を持っていただき、企画が具体化に向けて動き出しました。

相談者であるお母様自身も精力的に支援者を集め、「みらーとアールフェスタ静岡」の会期に合わせてショーの開催が実現しました。

会場となった百貨店の正面入口の周りには、ショーに足を止める人が集まり過ぎて、会場整理の人員を急遽増員しなければならないほどでした。

ショーが始まるとモデルたちは練習してきたウォーキングとポーズ、笑顔をしっかり決め、観客たちは手拍子や声援を送って会場を盛り上げてくれました。デザイナーのファッションを身にまとったモデルたちはそれぞれにかわいくて、カッコ良くて、盛り上げてくれた観客の皆さんの反応もイイ感じで、素晴らしいショーになりました。

【日時】平成31年2月17日(日)・24日(日)
(2ステージ×2日)
【場所】静岡マルイ 正面入口前 特設ランウェイ(静岡市)
【出場者モデル数】14人
【来場者数】約160人

8 他県センターとの連携と情報共有

（写真上）福井県で開催された障害者芸術文化活動普及支援事業東海・北陸ブロック事業報告会でのトークセッションでは各センターの活動報告が発表されました。
（写真左）あいちアール・ブリュットネットワークセンター（特定非営利活動法人 楽笑）では作家・作品募集や事業協力者の募集と連携、そして街や地域を巻き込んだ展示会の開催において、地域との信頼関係の構築から企画の持ち込み、運営まで具体的な事例と苦慮した内容、問題解決から開催へと導いた経緯を伺うことができました。

他県センターとの連携と情報共有が運営の新たな可能性を開く

一口に「障害のある人の文化芸術活動支援」と言っても元々想定していた事以外の問題に遭遇することがあります。

例えば作家・作品発掘ひとつをとっても、作品の選定にあたり作者の作品への意思確認や、著作・所有権はどこにあるのか（作家本人に作品に対する判断能力が不足している場合の対処）、訪問先で作家や作品を撮影した際、その写真をどのようにどこまで使用の許諾をいただけるのか。チラシ・パンフレット・インターネット・SNS等を利用した広報への掲載がどこまで許されるのか（最終的に作品の所有・管理者は誰で、誰に確認すれば良いのか、そしてその決定に関しての契約書面の取り交わし方法）。展示会出品に際して作品展示謝金を支払う際の金額や支払い方法（現金か振込か等）、展示会での授産品販売に際して支払われる売上を誰が（障害福祉事業所側なのか展示会主催側なのか等）どのように管理するのかなど、事業を遂行すればするほど実に様々な問題点が出てきます。

次々に浮上する問題に対処する際、大変に参考になったのが、他県での取組でした。何年も前から障害のある人の文化芸術活動支援において先を走る他県の取組と事例が、その時々の問題解決に大きく役立ちました。

東海・北陸ブロック会議では各センター担当者からの事業報告と運営や支援内容・具体的な対応等について活発な討議がなされ、同時に運営の参考となるセミナーも行われました。（富山で開催された東海・北陸ブロック会議）

富山県障害者芸術活動支援センター「ばーと◎とやま」では具体的な展示方法と作品に対する考え方や魅力の引き出し方、見せ方を学びました。

特に東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターの「社会福祉法人みんなでいきる」の取組と具体的なアドバイスには救われました。

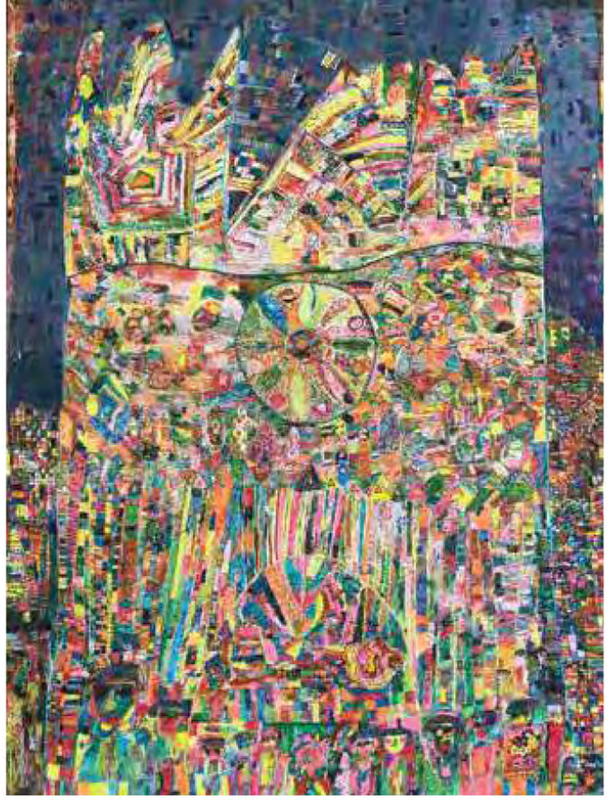
問題となっている案件については、やはり先を走るこうした中間支援センターはすでに経験済みのものも多く、その対処について、単に解決方法（対処方法）のみならず、考え方や捉え方、その判断へ至った経緯と背景、その他参考になる類似・関連する問題への対処等、様々な角度からのアドバイス・気付きを頂けました。

また、東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センターが主催する報告会やセミナーでの他県の取組発表は、様々な事例に対して対応や対処、そしてその成果が明らかとなっており、みらーとが直面している問題点に対して具体的な方向性を示してくれました。

そしてそこで親睦を深めた他県センター関係者との繋がりから生まれるネットワークは、事業を遂行していく上でとても心強いものとなり、様々な問題解決へ向けての対応と成果・課題等をデータ化し共有・連携することで、今後の事業実施に大きく貢献できるものと確信しています。

市川 文男：「未来へ」

永井 貴治：「街並み」



(左上)伊藤 清：「葉っぱ」　(右上)西村 照美：「サンピエトロ寺院」
(左中)井上 義明・井上 義治：「四季」　(下)鈴木 文明：「横たわる婦人」

田代 源一郎：「修善寺温泉花しょうぶ園」

9 協力委員からのメッセージ

協力委員 紹介

waC: wonderful art COMMUNITY スタッフ
元特別支援学校教員
吉田 恵美子
Emiko Yoshida

障害者アートの可能性

waCの活動を始めて丸6年。スタートは特別支援学校で出会った子どもたちの素晴らしいアートに触れ、卒業後も「表現と発表の場」を無くしたくないという思いからでした。現在メンバーは20名。月1回のクラブには、スタッフや多様なwaCファンなどを含めると総勢40人余りが会場に集まり、メンバーと共にその時間を楽しんでいます。また彼らのアート作品は県内外だけでなく外国にも飛び出し、いろいろな形で見る人々を楽しませています。

メンバーにとってのアートは自分を自由に表現するものであり、様々な人と繋がるバトンでもあります。

家庭や仕事だけでなく自分の好きなことができる場所や時間・仲間を持つということは、障害の有る無しに関わらずとても大切なこと。またその作品を「素敵だ」「素晴らしい」と認めてもらえればそれはメンバーの大きな自信につながることでしょう。

一方、彼らの作品はそれを見る人にとってはどんなものなのでしょうか？

その自由な形や色は見る人を明るい気持ちにしたり、ワクワクさせるかもしれません。「障害者」という今まで持っていたイメージが少し変わったり「どんな人が描いたんだろう」と作者本人に興味が向くかもしれない。

でも、それだけではないと私は思っています。

waCのメンバーによって描かれた吉田 恵美子氏の肖像画

「こんな風にはかけないわねえ。」あるwaCの展示会を見終わった女性たちの言葉です。「どうしても本物のとおりに描こうとしてしまうのよね。」自分たちが描こうとしていた富士山やパンダとは違っているのにその魅力に引き込まれたようです。

アートの価値が「他と違う」という側面を持つならば、その言動が「普通と違う」という目で見られてきた障害のある人たちのその「違い」こそが、作品の中に「魅力」として表現され価値あるものとして捉えられているわけです。違いはマイナスではなくプラス。

小さい時から「普通であること」を期待され、「みんなと同じであること」にエネルギーを使っている人が多い日本の社会。そしてそれらにとらわれない「自由さ」を併せ持つ彼らのアート。

「違うことこそ素晴らしい。」彼らのアートはそんなメッセージを私たちに送り込んでくれているように思います。

協力委員

紹介

特定非営利活動法人 アートコネクトしずおか　理事
学芸員／デザイナー／イラストレーター

松尾 雪音

yukine matsuo

みらーとの活動を振り返って

私がみらーとの活動に参加したきっかけは「障害のある人の創作活動のお手伝いがしたい。また、絵を描く楽しさや作品を鑑賞する楽しさを多くの方に知ってもらいたい。」と思ったことでした。

活動を進めて行く中で出会った作品は、美しい色彩と大胆な構図、自由な表現に溢れ「美術教育を受けずに独学で作り続けた人」とは思えない程素晴らしいものでした。

静岡県内各地で開催されたみらーと主催の展覧会に来場された方からは「とても感動した。細かく描かれた絵画や美しい作品がいっぱいで見に来て本当に良かった。」と感想を頂きました。

今後もより多くの方がこのような素晴らしい作品に出会うことで、作者が障害のある人であろうとなかろうと作品の魅力が受け入れられ「アートには障害のある、なしにとらわれない世界がある」ということが届き「共に生きる社会」の創造につながることを願っています。

協力委員

紹介

特定非営利活動法人 エシカファーム　理事長

風間 康寛

Yasuhiro Kazama

障害のある人と障害のある人を取り巻くアートについて

【髪と爪と汗】

「何でもええやん、カッコよければ」これが障害者アートの原点だと、数年前に一人で関西の名だたるアート系作業所さんを訪ね歩いた時に感じました。

そこではテクニックも基礎も、他人からの評価も自己顕示欲もなく、そもそもが「アート」と言う概念すらないままに、ある人は無心にある人は笑いながら創作活動をしていました。だから、そもそも「障害者アート」はアートじゃないんですよね。強いて言うなら、彼らの髪や爪、汗みたいものです。

爪を「伸ばそう」と思って伸ばしている人はいませんね、自然に伸びるものです。障害者アートもそんな感じで、彼らから自然と滲み出るドロリとしたものじゃなかろうかと自分は考えています。

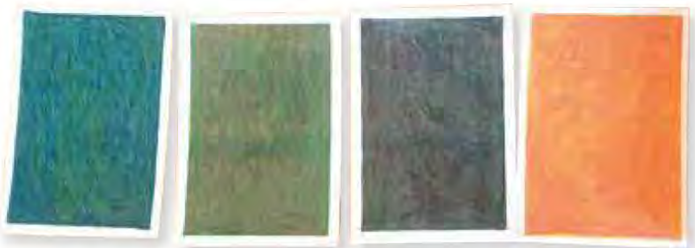
その時に大事なことって本当は「本人」ではなく「周囲の環境」ではないのでしょうか。

障害のある人が自分でペンを取り、紙を用意して大作を描き続けことは稀です。周りの支援者や保護者の方がその環境を作っていることが多いと思います。

そして、今回はみらーとさんが中心となり、彼らの髪や汗を「社会」と繋げてくれる機会を作ってくれました。

こんな周囲の「多様性の受容」が拡がった社会が、誰にとっても「おもしろいなぁ」と思える豊かさに繋がるのかなと思っています。

今回は微力ながら関われて楽しかったです。



貼り絵作家 安間 佐恵さん（浜松市）ご家族へインタビュー

こだわりの強かった少女時代
天賦の才能にいち早く気が付いた母の愛

障害に気づいたのは1歳の時です。ミルクを吐き続けてしまうので病院へ行ったら、神経が過敏とのこと。そこで障害があるのではと思い経過を見てきました。

小さい頃からこだわりが強く、幼い頃は「緑色」が大好きでした。

緑の服に緑の持ち物。かき氷もジュースも緑色でした（笑）。ある時家族で外食したんです。その時お父さんが「イチゴジュース」を頼んだら「赤はイヤ」だって怒り出してしまってそれは大変でした（笑）。

最初に私（お母さん）が切り絵をすすめました。学校から持ち帰ってきた折り紙のちぎり絵を見てその才能に気づきました。当時から多くの色を使って描く絵が上手でしたからこれは良いのでは！と思いました。

※ご両親は美術が得意ではないそうで、一体どこから来た才能なのかわからないと笑っていました。

写真：「佐恵の蝶々」

佐恵さんはどんな経緯で創作活動をされてきたのですか？

1980年（5歳）
多くの色を使っており当時から絵が上手。美術館等に連れて出かけていたということから、様々な作品に触れてきたことで影響を受けているのではないかとも思うとのこと。

1988年（13歳）
折り紙でのちぎり絵「魚」を学校から持ち帰ってくる。その才能に気づき、草花の本を題材として与えたところ、「ジャガイモの花」、「夏椿」の2作品をあっという間に作り上げたという。
「模写ではいけないな」と思い、母親が好きな生花を題材として勧めてから、草花を題材にすることが多くなる。花を描く際には、回転させて裏側などまで時間をかけて細かく観察するため、観察中に枯れてしまうことも。

1991年（16歳）
「とんぼとちょうちょ」より和紙に切り替える。

「とんぼとちょうちょ」

折り紙のちぎり絵「とんぼ」

折り紙のちぎり絵「魚」

1995年（20歳）
写真からの模写「アマゴ」。

2010年（35歳）
カレンダーからの模写「富士山2」。

今ではほとんどの作品が「蝶々」、「とんぼ」、「熱帯魚」などをモチーフとした空想画か、草花を題材にした写実画。その他、風景画などは家族でドライブがてらに描写するポイントを探し、1度場所を決めたら、その定位置に通いつめて作品を創作する事もあるという。
貼り絵を作風としているが、下絵のデッサンも緻密で正確。そして線が素晴らしく美しい。今では「これを描いて」と渡せば、何でも描けるようになったという。

佐恵さんの作品は、間近で見ても斬新な独自の手法で作られていて、その緻密さ、粘り強く仕上げる根気強さに圧倒されます。同時に、構図や配色の抜群のセンスと、その美しい仕上りに思わずうっとりと見とれてしまいます。

制作前のデッサン（スケッチ）

「富士山2」

「アマゴ」

139 匹のとんぼと 705 匹の熱帯魚

創作期間は1作品約3ヶ月
その集中力故に完成後は休養期間を設け英気を養う

タイトルはお母様が担当。佐恵さんは数に強いのだそうで、1997年「153匹の熱帯魚」や2018年「266匹の熱帯魚」など作品内のアイテム数は描き終わった時に佐恵さんが教えてくれるのだそう。

1枚の絵の創作期間は大きさにもよりますが約3か月。期間中は集中して制作するため、完成後は休養期間として1ヶ月ほど間を空けるのだと言います。週5日会社に通っているため、帰ってきて食事を済ませてから、2時間ほどテレビを見ながら作業。取材時も2時間以上休憩もなくずっと作業して見せてくれ、集中力、根気強さに驚きました。

部屋の壁にはたくさんの作品が飾られ、制作に欠かせない和紙のストックも色や材質ごとにきちんと整理されています。30年間にわたり佐恵さんの制作活動を支え、作品を大切に保管してきた様子からご両親の思いが伝わってきました。

佐恵さんの尽きることの無い創作意欲とアイデア、表現の豊かさは、安心して制作に没頭できる暖かな環境から生まれてくるのだと感じました。

佐恵さんの創作活動。これからも楽しみです。

インタビュアーと佐恵さん

作業風景。とても緻密な作業を根気強く続ける

作品には熱帯魚がよく登場する

制作過程

1.水張りした紙に下絵を描く
（筆圧が高く跡が残りやすいためHの薄い鉛筆を使用）

2.花→茎→葉→背景の順で和紙を貼っていく
※2012~2013年『139匹のとんぼと705匹の熱帯魚』のみ背景から制作。

3.SAEとサインを入れる。
この時はやはり達成感を感じ嬉しそうなのだと。

和紙の貼り方（取材時の場合）

1.15cm四方くらいに切られた和紙を1cm幅くらいで縦長にちぎる。

2.ちぎったものを更に3cmくらいの長さにちぎる。

3.不要紙の裏に和紙を置き、かわいいプラスチックの容器に入ったでんぷん糊を指でくるくると付ける。

4.前に貼り合わせた部分に隙間なく繋ぎ合わせるように配置し、なじませ、幅が均等になるように爪で整える。整えていくと際が少し盛り上がる。それが模様となる。葉脈などもその手法。

力を入れるためか、作品に触れないようにするためか、長くて綺麗な指の関節の曲がり具合が独特。背景の貼り始め位置は様々。作業中の絵の向きも様々（取材時は逆さま）。モチーフの周りにこよりで縁取る時もあるが最近はない。

写真（上）「サルトリイバラ」（中）「天竜川河口」
（下）「佐恵のとんぼ」

11 成果報告のまとめと今後の課題

活動する事で新たに見えてきたこと

平成30年9月19日のセンター開設以来半年間にわたって、コーディネーターとして手探りで活動を展開してきました。

まず、センターが開設された翌日から早速、相談業務の対応が始まりました。最初の相談内容はどのような支援が受けられるかという問い合わせでした。

センターとして計画している展示会開催について説明したところ、その方からはその後頻繁に連絡を頂くようになりました。後日、直接お会いして作品を拝見する機会がありました。その方の創作活動・環境について話を聞き、福祉事業所に所属しておらず就職もしていないケースでは、社会との接点が少なく、作品発表の機会がほとんどないという現状を肌身に感じました。

次に取り組んだのは作家、作品を発掘するためのアンケート調査でした。県内の福祉事業所、障害のある人に理解のある企業、福祉団体などに向け約1000通のアンケートを発送し、県を通じて特別支援学校にもアンケートを送りました。同時にセンターのホームページにも「作家・作品募集」のバナーを設けました。しかし残念ながら当初の反応は期待に沿わないものでした。「待ちの姿勢」では作家・作品の発掘は出来ないと考え、過去の発表実績や口コミ、協力委員のネットワークを基に訪問調査活動を行いました。展示会開催を経て徐々にアンケートへの回答や応募が増えてきており、作品の確認や訪問調査を充実するための体制作りが課題となっています。

舞台芸術についてはダンサーを招いた身体表現のワークショップと、静岡県舞台芸術センター（Shizuoka Performing Arts Center：SPAC）の舞台俳優を招いたワークショップの2つを開催しました。

また、センターへの相談をきっかけに「障害者モデルファッションショー」を開催しました。ダンス、舞台芸術の体験、発表について多くの参加希望があるという感触を得る事ができました。

舞台発表では出演者以外にたくさんのスタッフが必要となります。そのため準備、運営を行う組織作りから準備する必要があると考えています。

課題・問題点～解決へ向けて

相談支援

発表の機会を求める相談が大半ですが、まず発表できる場所の調査が必要でした。美術分野の発表については展示会場、ギャラリーなどの情報が、舞台芸術分野の場合はステージ、会場だけでなくリハーサル会場についても情報が必要となります。

それぞれの会場のバリアフリーの状況など、具体的な相談案件の積み重ねと並行して、より細かな情報を収集・蓄積していきたいと考えています。

著作権、権利擁護などの質問はまだ少数ですが、著作権セミナーに関心が集まったことからも今後、個別具体的な相談の増加が予想されます。弁護士との協力関係を強化するとともに、弁護士による定期的な無料相談会なども用意する必要があると考えています。

発表の機会創出

今年度は県の沼津・静岡・浜松の3か所で美術展を開催しました。美術展開催に当たっては作品選定の問題があります。

会場スペースの制約があるので、何らかの選定基準で出品作品を絞り込まざるを得ません。

一方で選考されない作品にも展示の機会を創る必要を感じ、課題と考えています。

小説、短歌、詩などの文芸作品も応募いただいていますが発表に繋げられないでいます。音楽なども同様に発表の機会が課題として残りました。

文化芸術の各分野に詳しい人材とのネットワーク作りを通じて、これらの分野の発表手段を考えたいと思います。

支援人材育成

福祉事業所職員や福祉団体職員、家族など日頃障害者支援の現場にいる人たちに支援のノウハウを伝える研修としてセミナーを3回開催しました。今後は美術、文芸、舞台など芸術分野の人材を対象に、障害のある人に支援を行うためのノウハウを提供する方向にも展開したいと考えています。

情報収集・発信

東海・北陸ブロック各県との交流を通じて、支援の充実を図りたいと考えています。

相談支援の記録にしても全国のセンターのノウハウを結集したフォーマットを利用することで業務負荷が軽減されます。作家・作品のアーカイブについても手段、方法などを共有したいと思います。

次年度に向けて

本年度の活動の中で数多くの素晴らしい作品に出会う事ができました。海外の有名な芸術家の作品も同じですが、作者と言葉によるコミュニケーションができないとしても、作品を通じて思いを共有し、心を動かされることがあります。美を感じる気持ちは世界共通だと感じます。

感動した作品があると、その感動を人に伝えたいという思いが生まれます。しかし、言葉では作品を説明しきれるものではありません。写真でさえ作品の素晴らしさを伝える事は困難です。実際に体感していただくしかないのです。

支援コーディネーターとしてできる事は、これらの作品をできるだけ多くの人に見ていただけるように手段、方法を創って行くことに尽きると考えます。

まだまだ多くの分野に作家・作品が眠っていると感じています。発表の方法についても新しい発想が必要になると思います。

次年度は更に活動の幅を拡大し、文化芸術活動の支援を推進したいと思いを強くしています。

静岡県障害者文化芸術活動支援センター　みらーと
支援コーディネーター　藤田 博史

12 作品アーカイブ 写真ライブラリー

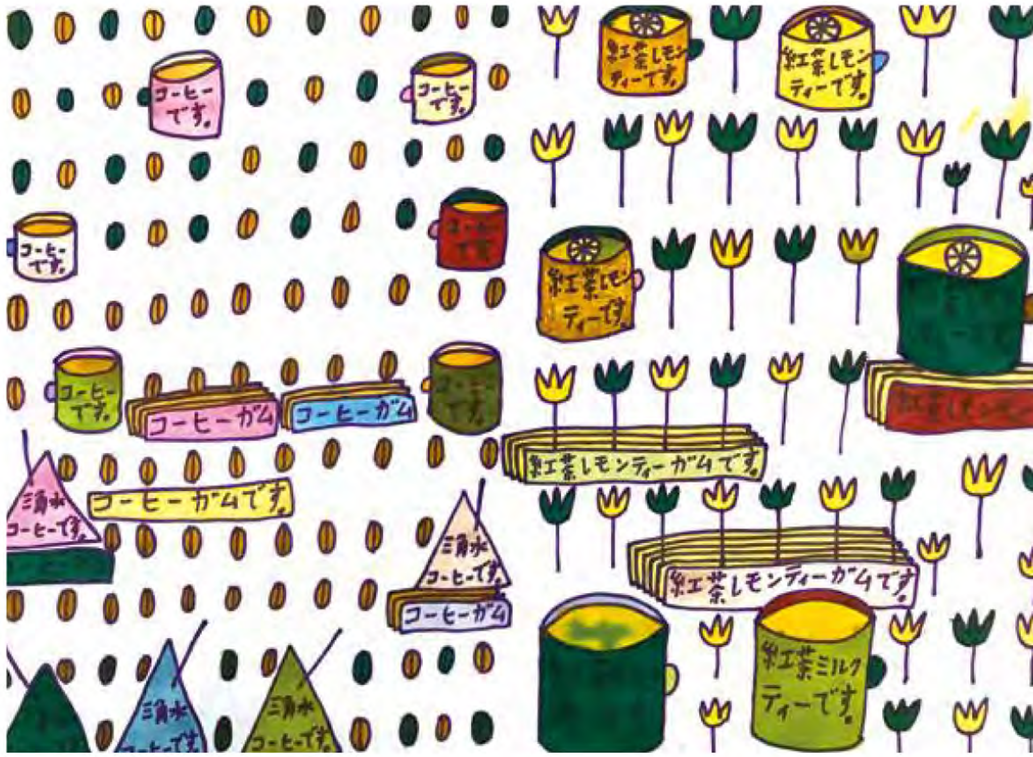
(左)松木 風太：「合体 !! ファラオロボ」 (中)吉村 松子：「キリンの親子」 (右上)圓藤 宗徳：「僕のヒーロー」
(右下)松本 五十美：「大きい虫と小さい虫」

(左上)小原 光貴：「ワンダフルフルーツ」
(左中)夏目 怜奈：「佐久間」(貼り絵の一部)
(左下)小原 光貴：「僕の住処」

(右上)佐藤 和紀：「アンコールワット」
(右下)木村 昭彦：「ダイナソー」

作者名非公表：「無題」

鈴木 あさ子：「古城」



土屋 留衛：「トラ」

(上)益田 典邦：「コーヒーガムです。」
(左下)K.K：「呪いの男」
(右下)松本 五十美：「楽園」

平成30年度
静岡県障害者文化芸術活動支援センター運営事業
成果報告書

風を創るひとたち

企画・編集・発行
静岡県障害者文化芸術活動支援センターみらーと

〒420-0031　静岡県静岡市葵区呉服町2-1-5　5風来館（ごふくかん） 4階
TEL 054-251-3520　FAX 054-251-3516
HP: https://mirart-shizuoka.com
Email: info@mirart-shizuoka.com

発行責任者　**鈴木 良夫**（認定特定非営利活動法人 オールしずおかベストコミュニティ 専務理事）
監修　**遠藤 次朗**（みらーとアートディレクター）
デザイン　**杉浦 秀幸**（サンキューデザイン）
印刷・製本　**株式会社 篠原印刷所**

平成31年3月発行